

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研究会有明病院大腸外科での研修を終えて

健生会土庫病院奈良大腸肛門病センター

横尾 貴史

この度、日本臨床外科学会国内外科研修プログラムとしてがん研究会有明病院大腸外科で研修をさせていただきました。社会医療法人健生会土庫病院大腸肛門病センターの横尾貴史と申します。始めに、このような機会をいただきました日本臨床外科学会 跡見裕会長、国内外科研修委員会 高山忠利委員長をはじめとした委員の先生に厚く御礼申し上げます。私は、平成20年に神戸大学を卒業し、平成24年4月より現在の所属先での勤務を開始しました。当院は199床の規模ではありますが、年間大腸癌手術件数120-140件であり、年間下部消化管内視鏡検査数は4,000件を超えます。私自身の大腸癌執刀件数は5年で119件であり、そのうち腹腔鏡手術は65件でした。奈良県では下部消化管内視鏡検査および治療も外科医が担当し、化学療法およびIBDの内科的治療まで外科医が担当しております。このような大腸に特化した勤務状況の中、年間大腸癌手術件数が722件である国内最高峰のがん研究会有明病院で大腸癌における手術から治療戦略に至るまでを研修させていただき今後の臨床に役立てたいと考えました。また、私は日本内視鏡外科学会技術認定医への応募を検討しており、その面でも鏡視下手術率95%のがん研究会有明病院での研修は私にとって最適なものでした。研修期間は2017年11月6日～12月1日までの4週間であり、大腸外科レジデントである12名の先生と行動をとともにさせていただきました。6時45分からの回診に始まり手術見学の後にカンファレンスで終了する毎日でした。多施設共同研究への参加の検討や治療方針を多角的視点で検討する場であるcancer boardや、週に2回術前術後症例について検討する消化器外科カンファレンス、火曜日の夜に4時間程度かけて治療方針について検討する大腸外科カンファレンス、病棟を担っているレジデントの先生で症例を一通り検討するレジデントカンファレンス、1カ月研修を継続させていただいたおかげで参加することが出来た病理カンファレンス、グランドカンファレンスなど数多くのカンファレンスが院内で行われており、大腸癌のみならず他臓器の知見についても広めることができ非常に勉強になりました。何よりも大腸癌に対する基本的な治療戦略が決められており、その上で各症例に応じて肝胆膵外科や化学療法科、消化器内科と合同で治療方針を決定されておられたことに感銘を受けました。リンパ節転移のある大腸癌をsystemic diseaseとして捉え、放射線治療も含めた術前術後治療を遂行されており、今後の大腸癌治療に対する私自身の考え方に大きな影響をあたえるものとなりました。

研修期間中に予定されていた手術症例数は65例で、そのうち原発性大腸癌は39例でした。再手術症例であってもそのほとんどが鏡視下に行われ、開腹移行することなく粛々と手術が進められていることに驚きを感じました。私自身が見学することができた手術は31件であり、その中には腹腔鏡下幽門側胃切除術、大腸癌浸潤に対する膀胱尾部合併切除術、転移性肝癌に対する肝部分切除術、会陰欠損範囲の大きな腹会陰式直腸切断術後再発症例に対するV-Y形成術など他科の手術も含まれておりフレキシブルにスケジュールを組んでいただいたことに非常に感謝しております。私が執刀すれば5-6時間かかってしまう腹腔鏡下腹会陰式直腸切断術もレジデントの先生では3時間台、スタッフの先生に至っては2時間半という驚異的なスピードで手術が行われていました。この速さが有るからこそ膨大な数の症例に対応することができるのだと確信しました。だからといって決して雑な操作はなく、息をのむほどの美しい手術が目の前で展開されており興奮を禁じ得ない状態でした。そして私と同世代のレジデントの先生

がスタッフの先生の熟練した技術を言語化して指導されている状態を直接目のあたりにすることで、学会のビデオセッションなどでは得ることが出来ない、“生の指導”を私自身も受けることが出来たような貴重な経験でした。

研修期間全体を通して、診療に関わる様々な場面で業務の無駄を削ぎ落として洗練・効率化されていたのが非常に印象的でした。カンファレンスでのサマリーはkeyとなる写真をスライドに添付して作成されておりプレゼンテーションの時間短縮がなされていますし、麻酔も硬膜外麻酔ではなくIVPCAとアセトアミノフェンの6時間毎の静脈内投与で除痛され麻酔時間の短縮を行っておられました。先述しました短時間での手際の良い手術もそうですが、随所で業務時間が短縮されることで治療方針を検討する時間や臨床データの管理を行う時間がしっかり確保されていると感じました。当院での業務は消化器内科領域に渡る大腸全般の業務であり日常診療に追われてしまっていて、reviewを行う時間を確保するのが困難です。規模は違いますが、がん研究会有明病院の業務効率化を少しずつ取り入れて当科全体の日常診療に貢献できればと考えています。期間中に開催されました「reduced port surgery研究会」にもがん研究会有明病院大腸外科の一員として参加させていただきましたし、見学に来られていた香港の先生を対象とした秋吉高志先生の講義も聴講する機会に恵まれました。手術だけではなく、今後の自分の臨床に対する姿勢や人生設計にまで大きな影響を与える貴重な体験となりました。不在の間、業務を負担し支えていただいた当センタースタッフ、そして快く大腸外科の一員として私を迎えてくださいましたが、がん研究会有明病院大腸外科の上野雅資先生、福長洋介先生、他大腸外科スタッフの先生、そして12名のレジデントの先生にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

